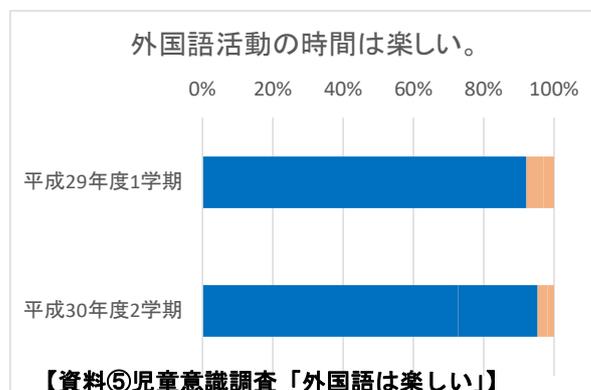


VI 成果と課題

1 研究の成果

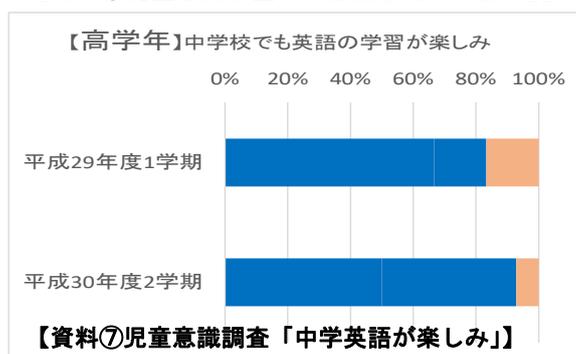
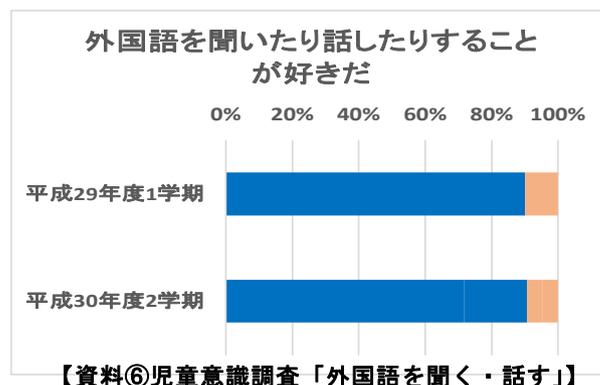
(1) 英語でコミュニケーションを図りたくなる必然性のある場面設定

児童意識調査の結果によると、「外国語活動が楽しい」という児童が9割を占めている(資料⑤)。これは、児童の実態に応じた単元のゴールの設定や単元全体を見通した単元デザインの工夫、児童のめざす姿をイメージし、「付きたい力」のために「どのような活動」「どのような順序、方法」で指導すればよいかを明確にした単元計画を行ってきたことで、児童の目的意識や学習意欲が高まったからだと考えられる。



(2) 英語に慣れ親しむ活動の充実

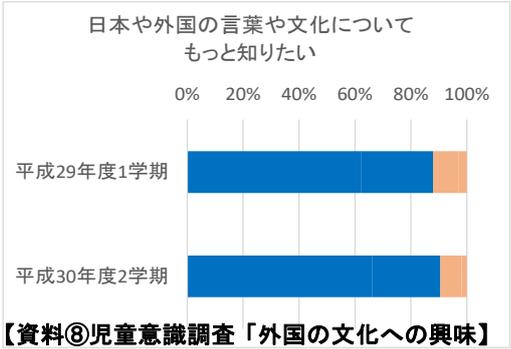
英語の表現に慣れ親しませるために、特性を生かしてチャンツやゲームを選択し、さらに語彙や表現だけではなくリアクション等を加えたやりとりに繰り返し取り組んだことで、自信を持って英語を話す児童の姿が多く見られるようになった。今年度はスモールトークを実践し、会話の続け方を指導してきたことで、既習事項を使って対話をつなげる児童が増え、「聞く」「話す」ことへの意欲向上に効果があったと考える(資料⑥)。さらに、ALTとの打ち合わせを綿密に行い、HRTがT1、ALTがT2という役割を明確にしたことで、ALTのネイティブな発音や英語独特のリズムを児童に多く触れさせることができ、児童が音声的特徴を意識して話そうとする姿が見られるようになった。また、音声で十分に慣れ親しませてから「書く」活動を行ったため、「読む」から「書く」への段階的な指導ができ、中学英語を楽しみにする児童が増加したと考える(資料⑦)。



(3) 評価の工夫

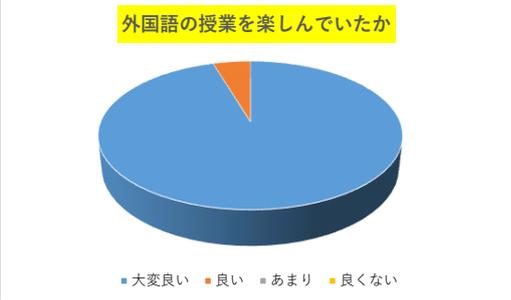
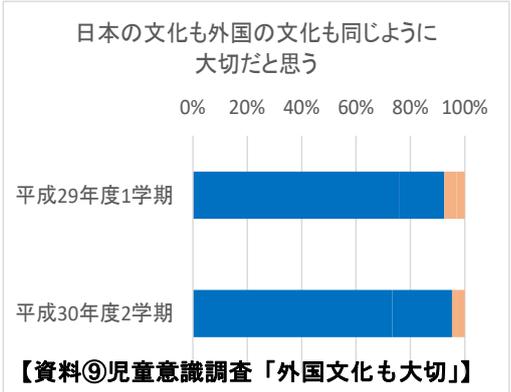
授業の途中で、Good communicationや発音を意識している児童を積極的に評価したこと

で、相手に伝わるように意識して発話する児童が多く見られるようになり、外国語活動の時だけではなく、日常的にそれらを意識して活動する児童が増えてきた。また、ふり返りカードの内容を工夫したことで、児童が Good communication の視点だけではなく、めあてについてふり返ることができるようになり、さらに、日本語と外国語の相違点についての気づきを記述する児童が増え、言葉だけではなく外国の文化について興味を深めることもできた（資料⑧）。



(4) 日常の中での英語に触れる機会と言語環境の工夫

毎朝の English Time の中で「白旗チャンツ」等に継続して取り組んだことで、児童が十分に英語の音声に慣れ親しみ、抵抗なく語彙や表現、歌をリピートしたり歌ったりする姿が多く見られるようになった。また、英語に関する掲示を各教室や廊下、児童昇降口掲示板等、校内至る所に設置したことで、他国文化への関心が高まった（資料⑨）。さらに国際交流や仮設住宅や学び集会での発表など、慣れ親しんだ表現を活用する場を設けたことで、保護者や地域への発信啓発にもつながったことが、授業参観後の保護者感想からも伺える（資料⑩⑪）



- 初めて外国語の授業を見せていただきましたが、授業中ほとんど英語での授業でしたが子ども達はとても楽しく取り組んでいるように見えました。先生もにこにここと楽しく授業されているように見えました。電子黒板で動画、歌なども出てくるので、わかりやすかったです。
- とても良かったです。ガッチリ教えるだけではなく子ども達の気が集中するようなゲーム感覚の学習も含まれていて、本人たちが楽しく学習する姿が見えました。家でもあのリズムを口ずさんでいました！！「外国語の授業が楽しい」と話もしてくれます。

【資料⑪】授業参観保護者感想の一部

2 今後の課題

今後の課題として、次のようなことが挙げられる。

- 児童の実態、日常生活、地域性に合わせたさらなる教材開発や「書くこと」への取組を工夫していく必要がある。
- 身に付けたコミュニケーション能力を他教科へ広げる実践を進める必要がある。
- 学習指導要領の全面実施に向けた円滑な接続と年間計画を工夫していく必要がある。
- 各領域における低学年からの系統について研究を重ねる必要がある。